

令和8年度 北海道・東北 体育・保健体育ネットワーク研究会 山形さくらんぼラウンド報告

テーマを「深い学びにつながる授業づくり」

とし、木原慎介先生や佐藤豊先生の提言を元に、スポーツや体育の見方、考え方について様々な視点や立場から改めて見つめ直す機会となりました。年代による現状と課題、どのような活動や発問により「楽しい」を味わうことができるのか等、児童生徒、教員の深い学びにつながる授業づくりに向けて、小・中・高・大、教諭・管理職・指導主事・教授・学生など様々な校種、立場が入り混じったグループで、それぞれの立場での現状や考え方を共有するなど、活発なグループワークがなされ、様々な気づきと学びの多い、今年度も実りある研修となりました。

昨年同様に参加者計28名（オンライン7名、参集21名）が集まり、オンラインによる全国各地からの参加や岩手県からの日帰り参加（昼も夜も）していただきました。本当にありがとうございました。来年も今年のラウンド以上に、みんなでわいわい言いながら学び合っているような会になれば、山形の保健体育はまだまだ進化していくと確信しております。



1 話題提供

東京国際大学 木原慎介先生より、『体育授業づくりに向けたスポーツ文化の再考 ～ピレネーのこちら側とあちら側～』と題し、「〇〇からみるスポーツ」として、「みる位置」でスポーツの楽しさや魅力が全く異なることについて話題の提供をしていただきました。「日本人」からみるスポーツでは、「体育」や「競技スポーツ」がまだまだ根強く（私も含めて）、「レジャー」としてのスポーツへの理解が不十分であること。攻撃と守備では、ボールを保持者が攻撃と言えるのか、ボール保持者はボールを守っているのではないかなど、体育教師として「常識」だと思っていたことが、児童生徒や社会ではもしかしたら、「非常識」なのかもしれない。「楽しい」授業を展開しているつもりが、実は児童生徒にとっては「苦しい」授業になっているのかもしれない。等々という意識をもちながら、授業づくりに向けて、どのような視点でみるべきか、どのような発問や学習活動をするべきか、どのような学習評価が考えうるか…、を再考してみたいと思いました。ピレネーは遠いので、まずは奥羽山脈の向こう側を覗いてみようかな。

2 グループワーク

桐蔭横浜大学 佐藤豊先生には「444の系統性」をテーマ設定をしていただき、12年間学ぶ中で共通する「楽しさや特性」について深堀りし、各領域でこそ味わえる楽しさを小1～4年、小5～中2、中3～の各段階で出し合いました。「運動遊び」では楽しさを指導しようとするものの、「運動」に向けて技能が重視されてしまう…、児童生徒の二極化（技能・体力・意欲）の広がりに対する指導方法はどうか…、話は尽きませんでした。しかし、校種や年代が入り混じったことで、想像できない、したことがない「楽しさ」や指導方法がたくさん飛び出し、目から鱗が落ちました。キーストーンは今ラウンドで何度も出てきた「レジャー」なのかもしれません。「運動遊び」からはじまる444の系統性を意識した指導が、豊かなスポーツライフを実現（継続）するための資質・能力を育成することにつながるのだと改めて学ぶことができました。いつか、マットの上ではなく、宇宙空間で前転する児童生徒の姿が見れるかもしれません。

